

金勝慶安加點詠草

神作 研一

解題

本稿は、元禄期の上方地下歌人金勝慶安（こんせけいあん）（慶安元年〈一六四八〉—享保一四年〈一七二九〉五月九日、八二歳）による添削資料四点の影印と翻印である（すべて岐阜県富加町郷土資料館現蔵）。慶安加點の資料としては、これが現在知りうるすべてであり、点者慶安の和歌観が窺知できる貴重なものだ。その歌学については、既に大要を別稿①にまとめたので、ここには資料編として本文を紹介したい。今、四点を年次順に配列してA〜Dの記号を付した。書誌的概要は次の通りである（アルファベット次段（ ）内の算用数字は『美濃加治田 平井家文藝資料分類目録』②の通し番号）。

A (374) 好形等 and 歌二十三首

* 正徳元年、金勝慶安点（六四歳）。* 12 / 89。

継紙一通。縦一五、四糎×横二〇二、六糎。楮紙。好形・

伊宣詠。添削ハ朱書。奥書（朱書）「十四点内美二 慶安」。

B (375) 好形等 and 歌二十五首

末尾二詠者兩名ノ点取表ヲ後書。端裏（後書）「金勝氏加筆正徳元年」。

* 正徳元年、金勝慶安点（六四歳）。* 12 / 92。

継紙一通。縦一五、四糎×横二七一、二糎。楮紙。好形・伊宣・好覚・貞恒・副隆詠。添削ハ朱書。奥書（朱書）「十四点内長亭美四 慶安（朱印）「郷／高」」。末尾二詠者五名ノ点取表ヲ後書。端裏（後書）「金勝慶安加筆正徳元卯年」。

C (376) 一慰等 and 歌四十四首（二十二番歌合）

* 正徳二年、金勝慶安点（六五歳）。* 12 / 236。

継紙一通。縦一四、二糎×横四八一、三糎。楮紙。一慰・雄溪・僊庵・好覚・貞恒・其由・宜風・冬音・副隆詠。添削ハ朱書、判詞ハ墨書。奥書「てんさくの通に清書被成点も／言葉書も朱の分は皆無用にして／墨書の評判計御書候

D (377) 副雄等和歌三十首

て哥合に／被成御清書候べく候」。端裏（後書）「金勝慶安
評判正徳二辰ノ年」。

凡例

* 正徳五年、金勝慶安点（六八歳）。* 12 / 10。
継紙一通。縦一五、三糎×横二六三、四糎。楮紙。副雄・
常観・冬音・仙庵詠。添削ハ朱書。奥書（朱書）「十九点
内長一 慶安（朱印「郷／高」）。端裏（後書）「^{敬し}勝慶安
加筆正徳五末年」。

Dの本文は、既に前稿^③にて紹介済みだが、ここに慶安加点の全資料
を一覧・掲出させておいた方が研究上有用だと判断して再録した。

なお、翻印にあたっては、見せ消ちなど添削の様子をそのまま再現
することをせずに、添削の結果成立した新しい本文を原歌の次行に置
くなど、おおむね前稿の方針を踏襲した。詳細は、次掲「凡例」につ
かれたく、また適宜影印を参照願いたい。

注

- (1) 拙稿「元禄上方地下の歌学―金勝慶安の場合―」（大輪靖宏編『江戸文
学の冒険』所収、翰林書房、平一九・三）。
- (2) 加治田文藝資料研究会編、富加町教育委員会発行、平一七刊。
(3) 拙稿「元禄期歌人の添削資料」（『金城学院大学論集（人文科学編）』
第一巻第一・二合併号、平一七・三）。

〔付記〕所蔵資料の紹介を許された富加町郷土資料館に厚く御礼申し上げます。

（かんさく・けんいち 本学文学部教授）

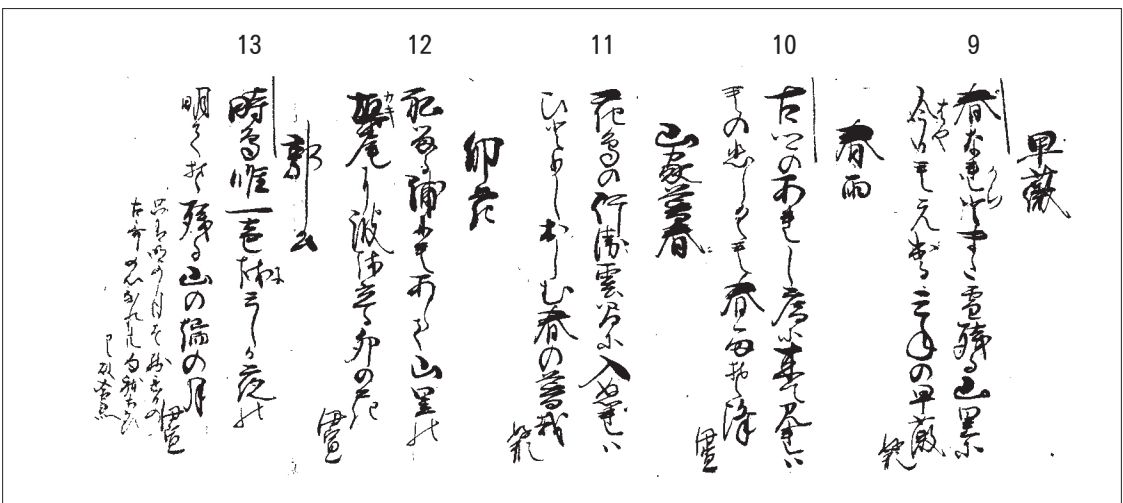
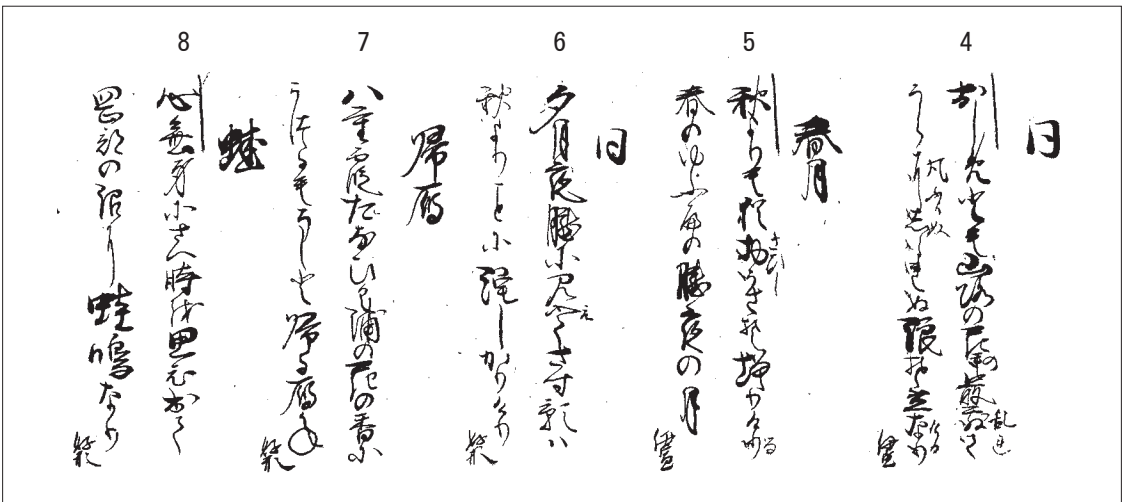
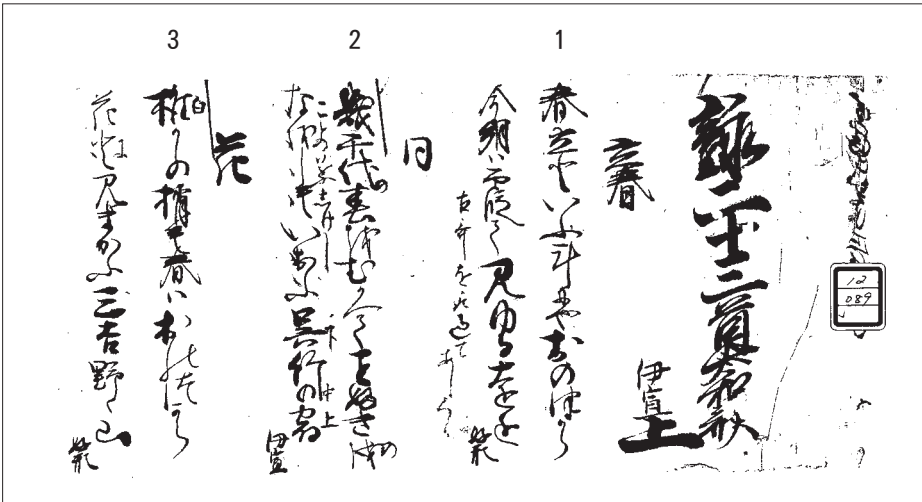
- 一、影印にあたっては適宜縮小し、なお一部に原本の余白部分を切り
継いだところがある。
- 一、影印編・翻印編とも、和歌の頭に通し番号を付した。
- 一、原歌の次行に、添削後の新しい和歌本文を併記した。
- 一、評語は「^へ」に、判詞は「[【]」に各々くるんで掲出し、適宜
句読点、引用符「[（]」[）]」を施した。
- 一、合点を「[○]」、長点を「[◎]」で示した。
- 一、「[（]」内は、神作による注記である。
- 一、漢字は、適宜通行の字体に改めた。
- 一、和歌本文、評語、判詞ともすべて、適宜濁点を付した。
- 一、虫損等による判読不能箇所は、「[□]」で示した。
- 一、誤字や脱字、仮名遣いの誤りについても原本のままとし、適宜
（ママ）と注記した。

〈影印編〉

A 好形等和歌二十三首

* 正徳元年、金勝慶安点。

(端裏) 正徳元年三月廿一日



14

七夕
九重の秋をさふりて夕れ
こゝろ秋の深き鶴の橋
豊

湖上舟

15

秋の舟の浦の秋の夕夜更々
なるふらふら水の月影
光

五七

16

降香の葉の麻の道ゆく
あかねふらふら人こもる
伊賀

千鳥

17

頂磨の浦の夜の月影
秋の舟の浦の秋の夕夜更々
か本一
伊賀

志

18

悲くもなれどまはれど
秋の舟の浦の秋の夕夜更々
一首に掛り
伊賀

19

思ふといふの秋の夕
人のこゝろ秋の深き
恨恋
伊賀

20

思ふといふの秋の夕
下ささきのうらもたりの
連懐
伊賀

21

思ふといふの秋の夕
うらもたりの
百寿在事不勝悲や
社語のこゝろ付
伊賀

22

世のけしきをさふりて
紫雲のやうなるや
私間碧海秋斜輝
伊賀

23

海のけしきをさふりて
本の乃りて
伊賀

十四点 月影二
慶

伊道十二首 月影二

好杉十一首 月影二

16 **旅宿多**
 古里より作はる実を此
 まささらは旅は多しなり
 旅里をうりといひ
 りやむはしとく

15
 まささらは行旅かや
 旅の包い袖の傍に
 かな

14
 志の行旅の
 志の行旅の
 志の行旅の

13
 人志守志を
 我袖たゆみ
 既方を言

20
 旅の初は
 旅の初は
 旅の初は

19
 志の初は
 志の初は
 志の初は

18
 志の初は
 志の初は
 志の初は

17
 古里より
 志の初は
 志の初は

24
 志の初は
 志の初は
 志の初は

23
 志の初は
 志の初は
 志の初は

22
 志の初は
 志の初は
 志の初は

21
 志の初は
 志の初は
 志の初は

25

月

限る十年の春を祝洗
習る名色の春と
加へて

十四日
長三
表一
副隆

好秋

五音

四點

表一

伊宜

五音

戴点

表一

好寛

五音

三點

表一

貞恒

五音

三點

表一

副隆

五音

戴点

表一

C 一慰等和歌四十四首(二十二番歌合)

* 正徳二年、金勝慶安点。

(端裏) 金勝慶安利徳二年

詠四十四首和歌

山霞

貞恒

丸

老奥の山も御家も丸の
空より夜は丸の丸

2

引く石
御家も丸の丸
丸の丸

持多
丸

行路梅

丸

引く丸常法の垣根の丸
丸の丸

丸の丸
丸の丸

4

丸
丸の丸

丸の丸

丸の丸

曉歸程

5

丸
丸の丸

丸の丸

6

丸
丸の丸

丸の丸

22 霧 左 右
 霧の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

21 霧 左 右
 霧の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

20 霧 左 右
 霧の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

19 霧 左 右
 霧の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

26 野鳥 左 右
 野鳥の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

25 野鳥 左 右
 野鳥の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

24 野鳥 左 右
 野鳥の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

23 野鳥 左 右
 野鳥の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

30 庭落葉 左 右
 庭落葉の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

29 庭落葉 左 右
 庭落葉の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

28 庭落葉 左 右
 庭落葉の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

27 庭落葉 左 右
 庭落葉の如くやうきふ
 めくろ 右り竹葉
 の以外 又二首 竹葉
 竹葉と胸に足あけり

夏夜橋

9 村に橋あり 庭に花もあまき

市と響く 軒の徒聲に

10 引立の石垣のあまき花の

色も 吟き 存の 徒聲に

不夜橋

11 引立の石垣のあまき花の

色も 吟き 存の 徒聲に

12 わたりのとて 世のあまき

くみくみ 徒聲のあまき

あまき

13 沈月の氣と 橋のあまき

徒の庭も 輝のあまき

14 眺むと 庭のあまき

先より 下次堂のあまき

いづれ

15 引立の石垣のあまき

神さ 輝のあまき

16 玉汗のあまき

ももに 時を 徒のあまき

あまき

17 いづれ 庭のあまき

あまき 徒のあまき

18 入道色 橋のあまき

目印 庭のあまき

あまき

19 いづれ 庭のあまき

中 庭のあまき

20 引立の石垣のあまき

庭 庭のあまき

あまき

21 いづれ 庭のあまき

庭 庭のあまき

22 いづれ 庭のあまき

庭 庭のあまき

別巻

23

思はく湖のぬれ物に

湖くもさそふ衣の袖を

上合則より考へず

24

思逢一帯は日一思ひ

ふ介一帯は日一思ひ

若焼

25

思はく湖のぬれ物に

思はく湖のぬれ物に

26

思はく湖のぬれ物に

思はく湖のぬれ物に

思

27

思はく湖のぬれ物に

思はく湖のぬれ物に

28

思はく湖のぬれ物に

思はく湖のぬれ物に

神

29

思はく湖のぬれ物に

思はく湖のぬれ物に

30

思はく湖のぬれ物に

思はく湖のぬれ物に

思はく湖のぬれ物に



〈翻印編〉

A 好形等和歌二十三首

〔端裏〕金勝氏加筆正徳元年

〔内題〕詠二十三首大和歌／伊宣上

- 1 立春 好形
春立といふ計にやおのづから今朝は霞て見ゆる遠近
〈古哥を取過て、あしく候〉
- 2 同 伊宣
幾千代春をむかへてことぶきをなをしもいおふ呉竹の宿
○幾千代の春をむかへてことぶきのことの葉しげし宿の呉竹
花 好形
- 3 椎かしの梢も春はおのづから花と見まがふみ吉野ゝ山
○白かしの梢も春はおのづから花に見まがふみ吉野ゝ山
同 伊宣
- 4 おしめども山路の花も散敷てうらにしられぬ浪ぞ立なり
おしめども山路の花の散乱れうら風ふかぬ浪ぞ立ける
○おしめども山路の花の散乱れうら風ふかぬ浪ぞ立ける
春月 伊宣
- 5 秋よりも猶物うさぞ増りけり春のゆふべの朧夜の月
○秋よりも猶さびしさぞ増りける春のゆふべの朧夜の月
同 好形
- 6 夕月夜朧に見へてさす影は秋よりことに侘しかりけり
夕月夜朧に見えてさす影は秋よりことに侘しかりけり
- 7 帰鴈 好形
八重霞たなびく浦の花の香にうつるもうしと帰る鴈がね
蛙 好形
- 8 心無身にさへ時を思ひ出て岡部の沼に蛙鳴なり
早蕨 好形
- 9 春なれどまだ雪残る山里に今日もえ出るみねの早蕨
○春ながらまだ雪残る山里にはやもえ出るみねの早蕨
春雨 伊宣
- 10 故郷のあれし庵に来て見ればもの悲しくも春雨ぞ降
山家暮春 好形
- 11 花鳥の行ゑ雲間に入ぬればひとりしおしむ春の暮哉
卯花 伊宣
- 12 船留る浦にもあらで山里の垣尾に波を立る卯の花
郭公 伊宣
- 13 時鳥唯一声をみじか夜の明てぞ残る山の端の月
○時鳥唯一声にみじか夜の明てぞ残る山の端の月
〈「只有明の月ぞ残れる」の古哥の心なれ共、句体ちがひ申候故、合点〉
- 14 七夕 伊宣
九重の秋もきにけり七夕のこよひぞ渡る鵲の橋
湖上月 好形
- 15 雪 伊宣
汐やかぬ浦の秋風小夜更てほのかにかむ水の月哉

16 降雪に柴の扉の道断てあわれとふべき人とても無

○降雪に柴の扉の道断てあはれとふべき人とても無

千鳥 伊宣

17 ○須磨の浦霜夜の月の影寒みね覚ものうく千鳥鳴なり

〈出来申候〉

恋 伊宣

18 愁てもなきてもかひぞなかりける我身ながらも我身ならねば

〈一首に体なし〉

同 伊宣

19 思ふこといはで此身は恋しなん人のこゝろを夫としらねば

○思ふこといはでたゞにややみぬらん人のこゝろを夫としらねば

〈古きながら詞のくさり様を御合点可被成ため、如此申候〉

恨恋 好形

20 恋せしも思ふ甲斐無秋の野の下はふ葛のうらみなりけり

○恋せしも思ふ甲斐無秋の野の下はふ葛のうらみなりける

〈三連ン字、きらひ申候〉

述懐 好形

21 習ぞと思ひながらも世の中のうきにはしるきなみだなりけり

○習ぞと思ひながらも世の中のうきにはもろきなみだなりけり

〈珍重〉

百年世事不勝悲といふ杜詩のこゝろを 伊宣

22 世の中にながらえまあらばうきことの幾年経るとなどかやみなん

松間碧海映斜輝といふこゝろを 好形

23 入海の汀の松は高けれど木の間に見ゆる沖つ白浪

○わだつみの汀の松の高ければ木の間に見ゆる沖つ白浪

十四点、内美二。慶安

伊宣 十二首 点八、内美一。

好形 十一首 点六、内美一。

B 好形等和歌二十五首

〔端裏〕金勝慶安加筆正徳元卯年

〔内題〕詠二十五首和哥／伊宣上

九月十三夜 好形

1 ○此秋の名残といへば誰里も猶惜まるゝ月の影哉

同 伊宣

2 暮て行秋の名残の月影は猶おしまるゝ物にぞ有ける

〈「物にぞ有ける」などの延る手尔葉は、言語にあまりたる

ふかき心をふくめる習ひに候〉

同 好覚

3 長月の夜すがら花の白妙に玉にも抜ける露ぞ散ける

〈句作、あるべし〉

同 貞恒

4 後の夜の月のかつらのみやはなる光を花の露に移して

- 5 <てどめの哥は、前へかへりてとまる事に候。上にていひ切る文字なければ、「て」と留り不申候>
同 副隆
- 6 菊の上に乱るゝ露も月影の照てぞ結ぶ後の今宵は
<一首、ふらち也>
暮山鹿 好形
- 7 暮かゝる秋の日さびし足曳の山の奥まで棹鹿の声
○秋の日のいとゞさびしき夕暮に山よりやまの棹鹿の声
<「いとゞ」とか「猶」とか申詞、不入。是は、つゞかざる哥也。以後、御工夫>
同 伊宣
- 8 山里に物やおもゑど鳴鹿（マ）の声より暮て残る影なき
○山里に物やおもへど鳴鹿（マ）の声よりくるゝ夕日さびしき
<「影」は、日影成べし。「暮て」とばかりいひては、いかゞ>
同 好覚
- 9 ○龍田山妻どふ鹿の鳴時は猶夕暮の秋ぞ物うき
同 貞恒
- 10 さしてだに秋の夕べの淋しきに外山にそよぐ棹鹿の声
○さらでだに秋の夕べの淋しきに外山を渡る棹鹿の声
<珍重>
同 副隆
- 11 鳴とよむ小鹿の声は夕日さす山の峡より聞えきにけり
<下の句、いや敷聞え申候>
- 12 忍恋 好形
いつと無逢初しより中ぐに人にしられぬ恋ぞ増れる
<「逢後忍恋」の心なるべし>
同 伊宣
- 13 恋せずはかゝるうさをばよもしらししのぶに付ておもほ（マ）ぞする
<心いやし>
同 好覚
- 14 人しれず忍びて通ふ心には我袖だにも乾間ぞ無
同 貞恒
- 15 しられじと包む涙の雫をばしのぶ軒端の露とまが（マ）多て
○しられじと包む涙の雫をばしのぶ軒端の露にまがへん
<珍重ぐ。てどめ、前にあり>
同 副隆
- 16 もらさじな行末かけて思川深くぞ包む袖の涙を
○もらさじな行末かけて思川深くも包む袖の涙は
<尤宜候>
旅宿夢 好形
- 17 古里に住しより実憂事のまさるは旅の夢路也けり
○草枕うきが上にも憂事のまさるは旅の夢路也けり
<住里を「うし」とは、いかゞ。御哥、尤珍重ぐ>
同 伊宣
- 18 古里をおもふに付て旅の空岩根の床に夢を結びて
同 好覚

18 ○程経ては古郷恋し旅枕夢なればこそ帰るさもあれ

〈心面白候故、点いたし候。句作、猶あるべし〉

同 貞恒

きのふ見し越路の夢は引かへてしらぬ都の花ぞ詠むる

〈題の心、外に成申候〉

同 副隆

いかなれば旅の枕に結ぶてふ夢さへみやま分て行らん

◎いかなれば旅の枕に結びぬる夢もみやまを分て行らん

〈「てふ」と申詞、「といふ」と申詞に候。爰には、いかゞ〉

寄花祝 好形

21 ○万代の春を迎て此宿の花も老せず霞む空哉

同 伊宣

大君の御代を祝て春毎に花は替らぬ色ぞ増ける

○大君の御代を祝て春毎に替らぬ花の色ぞ増れる

同 好覚

万代も替らぬ春にめぐり来て風も豊に匂ふ初花

○万代も替らぬ春のめぐり来て風しづかにも匂ふ初花

同 貞恒

尽せじの花の光は久堅の雲井静けき万代の春

○尽せじの花の光も久堅の雲井に匂ふ万代の春

同 副隆

25 限無千年の春や祝らん替らぬ色の花をかざして

十四点、内長壹、美四。慶安（朱印「郷／高」）

好形 五首 四点、美一。

伊宣 五首 貳点。

好覚 五首 三点。

貞恒 五首 三点、内美貳。

副隆 五首 貳点、内長一、内美一。

C 一慰等和歌四十四首（二十二番歌合）

〔端裏〕金勝慶安評判正徳二辰ノ年

〔内題〕詠四十四首和歌／伊宣上／好形上

山霞

1 左 遠近の山も残らず久かたの空より霞む春の色哉 一慰

○遠近の山も残らず久かたの空うち霞む春ののどけさ

〈宜〉

2 右 朝毎に立や吉野、山霞華に増る、春の色哉 雄溪

○みよしの、吉野、山の朝霞華におとらぬ春の色哉

〈「山霞」、いやに候。宜〉

【持なるべし】

行路梅

3 左 主しらぬ余所の垣根に立寄て過行袖にとむる梅が香 僊庵

○主しらぬ余所の垣根のなつかしみ過行袖に匂ふ梅が香

〈面白候〉

4 右 聞ふかく道はあやなし梅の香のほひを誰か聞て問まし好覚

【右の哥は、一首さだかならず。左を勝にさだめ侍る】

曉帰雁

5 左 ね覚する曉毎に音すなり旅路をいそぐ春の鴈金 一慰

◎ね覚する曉毎に朝だちて旅路やいそぐ春の鴈金

6 右 ちかひ（マ）をくおのが越路の契にや曉かけてかへるかりがね貞恒

○わすられぬおのが越路の契にや曉かけてかへるかりがね

【右の哥、珍敷き心なし。左は、いそぐ旅路、夜をこめて、朝だつ、風情面白、勝ものならし】

同

7 左 哀さも何とはなしに曉のね覚に帰る鴈金の声 其由

○老らくの泪もよほす曉のね覚に帰る鴈金の声

8 右 曉のね覚の床に聞ゆるはかねにもあらで帰る鴈金 宜風

【右の哥、「かねにもあらで」、心俗なり。左かつべくや】

山家待華

9 左 いつとなく軒端の雲も立さりてかすみの空に花ぞ待るゝ好覚

○いつとなくまがひし雲も立さりてかすめる空に花ぞ待るゝ

〈珍重〉

10 右 住荒るゝ柴の戸ざしの起居にもさかり遅しと花ぞ待るゝ宜風

○住荒るゝ柴の戸ぼその起居にも今や遅しと花ぞ待るゝ

〈珍重〉

【左右ともよき哥なれば、持なるべし】

山家時鳥

11 左 いかなれば住をならひにほとゝぎすまくらの山に百十返り鳴 冬音

〈上の一、二の句、不聞候〉

12 右 山里をうしと見てかは郭公たゞ一声に鳴すてゝ行 僊庵

○山里をうしとやは見て郭公たゞ一声に鳴すてゝ行

【右、勝にや侍らん】

夕立

13 左 嵐吹松の木末に雲（マ）きへて降跡もなき夕立の空 冬音

○嵐吹松の木末に雲きえて降跡もなき夕立の空

14 右 秋近き露よりしげき夕立に庭の小笹のかはく間もなし 好覚

【右、二の句、三の句、いかゞ。左、勝てきこゆ】

夜鹿

15 左 ○更る迄小ぐらの山になく鹿の夜半にや独妻を恋らん 貞恒

16 右 秋風にしばし枕の夢覚て夜ぶかく鹿の音をのみぞ聞 好覚

○秋風にしばし枕の夢覚て夜ぶかき鹿の声のわびしさ

田家秋

17 左 果しらぬことしの秋もめぐり来て賤が門田も色付にけり僂庵

○いつとなくことしの秋もめぐり来て賤が門田の色付にけり

〈宜候〉

18 右 頃日は門田の稲葉穂に出て千々に数そふ秋の夕露 冬音

【右の哥、心不首尾なり。尤左かちたり】

鶉

19 左 たゞさへも物の淋しき折成にいかにとてかはうづら鳴立僂庵

○いとゞさへ物の淋しき折成にいかにせよとかうづら鳴らん

20 右 ○行秋にいとゞ哀はふか草の里淋しくもうづら鳴なり 副隆

〈珍重〉

【左、「折成に」の言葉、ぬるし。右の哥、名所のいひかけ、又一首体宜く侍れば、勝に定め侍る】

霧

21 左 足曳の枕の山のちかきさへそれとも見えぬ霧の夕暮 副隆

22 右 ほのか成煙も共に立こめてそれとは見えぬ秋の夕霧 好覚

○ほのか成煙も共に立こめてそれともわかぬ秋の夕霧

〈出来候〉

【左の哥、まくら詞のうつり、いかゞ。又座句、不宜。右の哥、すなほにて、勝となるべし】

野鳴

23 左 哀さは塵にまじらふ身にさへも野に臥鳴の羽音にぞしる僂庵

24 右 鳴虫にあらで哀は深草の野に臥鳴の羽音成らん 冬音

○鳴虫にあらで哀は深草や野に臥鳴の羽音成らん

【左の詞、塵にまじはるとは神の事なり。一首、聞えず。右の哥、勝成べし】

擣衣

25 左 秋寒く夜半に焼火の影見えておとのみひとり衣打なり 貞恒

〈一首、ふらち也〉

26 右 事繁き賤が身なれば長き夜をねもせで月に打衣かな 冬音

○ひめもすになす事繁き賤なれば長き夜すがら衣打らん

【右の哥、かち侍る】

初冬

27 左 音信るゝ四方の嵐に冬来ぬとつけてや今朝の時雨成らん貞恒

28 右 ○立籠し霧も晴れば野も山もあらはに見えて冬は来にけり副隆

【右を勝とす】

庭落葉

29 左 ひとつとなく梢まばらに成行て庭に落葉のちり積るなり 僂庵

○ひとつとなく梢まばらにちり行て庭の落葉と成にける哉

30 右 木の間より月こそ出れ今ははや庭に落葉の降ぞ積れる 好覚

○さはりなく月もぞ出て今ははや庭に落葉の降ぞ積れる

【両首、大かたひとし。持に定め侍る】

同

31 左 ○時雨降音にまがへてあらし吹庭には猶も木の葉散なり 雄溪

32 右 紅葉せし梢まばらに成行て秋の形見と庭に散しく 僊庵

○紅葉せし梢まばらにちり行て秋の形見ぞ庭に残れる

〈珍重〉

【左の哥、落葉の音、時雨にまがへる事あり。ふれたり。右の哥、秋の形見残せる心、面白し。勝て聞ゆ】

山路雪

33 左 いとまなみ柴刈人も頃日は通はぬ迄につもる白雪 副隆

○朝な夕な真柴刈ぬる山人も通はぬ迄につもる白雪

34 右 誰里も同じ色成白雪のわけても積る深山辺の奥 好覚

【右哥、「色」と「積る」と事相違なり。左の哥、すなを（マ）なり。勝とす】

雪中恋

35 左 降埋む雪の夜なれば我からのあかぬわかれも難面かりけり 冬音

〈不聞え〉

36 右 詠れば此方の空も白雪につもる思ひのやるかたもなし 貞恒

○詠れば此方の空も白雪やつもる思ひのやるかたもなし

【左、心、聞得がたし。右を勝とすべし】

顕恋

37 左 しのび来し袖の涙のいつとなく世に顕るゝ種と成けり 貞恒

○しのび来し涙の露のいつとなく世に顕るゝ種に生けり

〈面白候〉

38 右 涙川測と成迄つゝみしに甲斐なくもるゝ袖の白波 冬音

○涙川いつかは測と成ぬらんつゝむ甲斐なき袖の白波

〈出来候〉

【両首、共に宜。持成べし】

月夜旅行

39 左 憂事の増る物かは有明の月の夜すがら旅に行身は 僊庵

○憂事の増る物かは旅衣あこがれて行有明の月

40 右 宿をしも定めぬ旅は野も山も月迄共に分て行なり 副隆

○草枕定めもやらで野も山も月迄共に行末の空

【左右共、一ふし面白し。持にこそ】

夕嵐

41 左 夕暮の雲の気色も替りけり吹乱れぬるけふのあらしに 貞恒

42 右 久堅の空の海さへゆふぐれの嵐に雲のなみもたち行 副隆

○久堅の空の海さへゆふぐれの嵐に雲のなみぞたち行

【右勝】

賀

43 左 動きなき我大君の恵とてさか行民の御調たえせぬ 宜風

○動きなき我大君の恵にてさか行民も御調たえせず

〈珍重〉

44 右 出る日の光はいとゞますかゞみくもらぬ君が御代ぞ久敷副隆

○出る日の光もいとゞますかゞみくもらぬ君が御代ぞ久敷

〈珍重〉

【二首、目出度、よくいひかなひたり。持に定め侍る】

てんさくの通に清書被成、点も言葉書も朱の分は皆無用にして、
墨書の評判計御書候て哥合に被成、御清書候べく候。

〈かやうに申候ては、曉に成習ひに候。風情よろし〉

海帰鴈

3 仮初の宿りも浪の千へ百へ海原遠く帰る鴈金 冬

仮初の宿りも浪のうきねして海原遠く帰る鴈金

4 見送れば果しもあらぬ海原を雲にかくろひ帰る鴈金 常

○見るからに果しもあらぬ海原を雲にかくろひ帰る鴈金

苔上落花

5 ○白妙に散埋みぬる花を今朝雪と緑の苔の通路 副

6 風誘ふ梢の花のしら雪に苔の緑の色もうつろふ 仙

樹陰卯花

7 夏迄も木陰は雪の残るかと驚かれぬる宿の卯の花 仙

○夏迄も木陰は雪の残るかと驚かれぬる野への卯の花

8 消残る雪と見へしも木隠に猶日数へて咲る卯の花 冬

雨後蟬

9 村雨の晴行跡は雲もなき空迄響く蟬の諸声 仙

10 ○夕立の名残の露に鳴蟬の声も冷しき衣手の森 冬

〈珍重〉

2 山の端もほの見ゆるより明初て麓の里に立霞哉 常

○山の端はほの見え初て麓なる里に朝けの霞たなびく

閑庭露

D 副雄等 和歌三十首

〔端裏〕 □勝慶安加筆正徳五末年

〔内題〕 詠三十首和調

曉霞

1 横雲の立とも見えず打むかふ山の端いと霞増れる 副

○横雲の引とも見えず山の端は八重の霞ぞ立へだてぬる

- 11 夫かとも問れぬ庭は秋草に心のまゝの露の夕暮 常
 ○夫かとも問れぬ庭は秋草にをきしをまゝの露の夕暮
 〈古哥取、面白候〉
- 12 あだなりと見し世の露も今更に心をみかく浅茅生の宿 副
 〈聞えがたし〉
- 13 澄月の影を移して水瀬川波の底にも秋の色哉 仙
 水郷月
- 14 ○眺やる水上遠く照月の光に下す宇治の柴ふね 副
 〈珍重〜〉
- 15 ○千入迄染し楓を分行ば袖さへ秋の色に出けり 仙
 行路紅葉
- 16 玉鉾の道行人の袖笠もともに時雨の染る丹葉々 常
 落葉
- 17 吹誘ふ音を聞にも冬の夜のあらし寂しく木葉降也 副
 ○いねがてに聞ゆる音も冬の夜のあらし寂しく木葉降也
 〈出来候〉
- 18 ○今朝見れば積る落葉に浅茅生の目馴し庭も面替して 仙
 ○今朝見れば積る落葉に浅茅生の目馴し庭も面替けり
- 19 いつとなく枯て砌の池寒み芦の臥葉ぞ氷閉ぬる 副
 寒蘆
 ○いつしかに池の砌の風寒く枯臥す蘆も氷閉けり
- 20 ○水鳥の床もあらはに三嶋江や霜枯寒き蘆の村立 冬
 〈風情、面白候〉
- 21 いかなれば軒端に並ぶ忍草よそめに袖の涙せくらん 常
 近恋
 〈心さだか不成〉
- 22 いひかはす蘆の中垣隔ても思ひはおなじ軒の下草 冬
 〈下葉は思ひしげるとや。不聞〉
- 23 思ひせく泪の雨の折〜に馴て色そふ山姫の袖 冬
 馴恋
 〈上の句、「馴恋」にあらず〉
- 24 ○忍逢し昔も同じ思にはなれし印と何をかはせん 仙
 寄灯恋
- 25 窓白く明行閨に灯のきゆるばかりの思をぞする 仙
 ○窓に入風ならなくも灯のきゆるばかりの思をぞする
- 26 ◎待侘て独ぬるよの灯はけなくもくらき心ならひか 常
 待侘て独ぬるよの灯はもへて思のくらき物かは

故郷

27 何国ぞとさして分べき方もなし葎に閉る古里の庭 常

○垣ねぞとさして分べき方もなし葎に閉る古里の庭

28 斧の柄の朽もしらず住荒て里は昔の面影ぞなき 冬

○斧の柄の朽るとなしに住荒て里は昔の面影も見ず

柳

29 神垣や隔はあらし柳葉の香を一筋に留てさゝまし 副

○千早振神代のまゝに柳葉も栄ひさしき天の香久山

冬

十九点、内長一。慶安（朱印「郷／高」）